掃苔会の活動報告
阿蘭陀通詞・名村家本家とその墓地の確認

原田　博二

平成20年3月1日のこと、晧台寺後山の町年寄高島家（本家）墓地一帯の草刈りを終え、石段を下りかけた時、その下の段の墓地の道路沿いに墓石が積み重ねられていたが、そのなかに「名村八左衛門妻」や「名村進八正富妻」などの文字を発見した。 この名村こそ、その所在が全く確認されていなかった阿蘭陀通詞名村家（本家）の墓地であったのである。 さらに、平成21年3月5日、長崎加工石材共同組合の方々のご協力によりこの積み重ねられた墓石の一つ一つを移動、文字を全て記録することができたのである。

名村家は、この本家と八左衛門系の別家と、元次郎系の分家があったが、現に八左衛門系の名村家（別家）の墓地は、晧台寺後山の旧望江庵の東側、道富丈吉の墓碑に隣接して存在している。

元次郎系の名村家（分家）の墓地は、渡辺庫輔先生が調査されたノートによると、「名村氏（晧台寺下ノ段）」「名村先祖累代墓」とあるので、渡辺先生が調査された時には、すでに1基にまとめられていたのである（渡辺先生は、右陰・左陰・裏に刻まれていた八左衛門ほか30名の法名、没年、俗名等を記録されている）。 この同家墓地は、「晧台寺下ノ段」とあるが、現在、同家墓地は確認されていない。おそらく無縁墓地として整理されたものと思われる。

ところで、今回、確認された名村家本家の墓地は、古賀十二郎先生も、正続の「長崎名家墓所一覧」などをはじめ、ほかの著作等にも一切触れておられない。

実は、昭和57年に「宮田安著長崎墓所一覧風頭山麓編」（長崎文献社刊）が刊行されたが、同書の図面の全部は筆者が担当、この墓地も、当時、墓石があることはなんとか確認できたが、まさに樹木が生い茂りジャングル状態で、とてもじやないがなかに入ることができず、墓地ということで、「ハカ」と表示したことが思い出されるのである。

いずれにしても、今回、長年（おそらく20年以上）その所在が忘れられていた本家名村家墓地が確認されたのであるが、このことは、単に墓地が確認されたばかりではなく、由緒書等、関係史料の乏しい同家のことを知る、この上もない貴重なものとなったのである。以下、名村家のことについて記述する。

名村家の始祖八左衛門は、「由緒書」によると、播州龍野生まれで、若年の頃に平戸に移住、オランダ商館の通訳となった。寛永18年（1641）オランダ商館の出島移転とともに長崎に移住、阿蘭陀通詞に任じられた。晧台寺境内に、この初代八左衛門が正保2年（1645）建立した供養塔が現存している。

以下、同家は、2代八左衛門、3代八左衛門、4代八左衛門、5代初左衛門と続いたが、4代八左衛門以外、全て今回墓碑が確認され、さらには、初代八左衛門、2代八左衛門、3代八左衛門の法名、没年等は、渡辺先生が筆記された「晧台寺過去帳」にある初代八左衛門、2代八左衛門、3代八左衛門の法名、没年等と全て一致するのである。また、5代初左衛門の法名が月船古帆居士、没年が天明8年6月朔日ということもわかったのである。

しかし、この墓地には、4代八左衛門の墓碑が確認できないが、4代八左衛門は、前述の元次郎系名村家の「名村先祖累代墓」に法名、没年等が刻まれているので、この元次郎系名村家の始祖とされたため、この本家墓地には最初から墓碑はなかったものと考えられるのである。 また、5代初左衛門の養子直三郎は、諱を貞儔、天明5年正月25日に24歳で没、その妻は名を筑、徳見氏の娘で、天明6年10月21日に没、二人の間に生まれた進八は、諱を正福、文政7年11月19日に没、その妻は名を貞、安川吉兵衛の娘で、文政5年9月19日に42歳で没などといったことなどを新たに知り得たのである。

ちなみに、この名村家本家は、5代初左衛門の養子直三郎が24歳で没した後、代わりに迎えた養子恵助も、寛政10年（1798）オランダ商館長と内通したことなどが露顕、処刑されたため、以後、断絶するに至ったものと考えられるのである。

以上、興味深いことなど、まだまだありますが、今回は概報にとどめ、詳細は、長崎談叢に掲載予定ですのでご期待下さい。（本会会長）